



梅雨空に可憐な花を付ける露草

(財) 福澤記念育林会 「育林友の会」ニュース

第2号 発行日 2002年7月18日
財団法人 福澤記念育林会「育林友の会」
東京都港区三田2-15-45
慶應義塾 管財部 管財課
TEL 03-5427-1532
FAX 03-5427-1533
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~ikurin/>
編集・印刷 海瀬亀太郎

歌う植林行

長島 昭

英国の詩人ウィリアム・ブレイクの詩に、一粒の砂や一滴の水に宇宙を見ることを詠った感動的な1節があります。私たちが1枚の木の葉を見るときに、そこに見渡す限り広がる自然を、そして1本の木を見るときに、そこに昔から伝わる命の不思議を感じるすることができます。森林はただの樹木の集合ではなくて、私たちの想像力に補われてふくらみ、まるで山全体の木の葉が一つの生命体のように意志が感じられます。

5月に、育林友の会のメンバーも加わって、栃木県黒羽で、地元の方を加えると100人近い人々が参加して福澤記念育林会の植林行事が行われました。雨必至という前日までの予報を覆して絶好の植林日和、ご協力下さる地元の方々ともども山へ行きました。関西では見ませんが、東北の山には、大木に覆い被さって、見事な野生の藤が咲いていました。野外のお弁当も済んで、一人あたり3-5本の植樹では少々物足りない感もありましたが、それはさておき、みんなで斜面に植えた木のそばに立ち並んで、なんと歌を歌うことになりました。私も植林に何度も行きましたが、現場で大合唱は初めてです。その森は慶應義塾のある年度の卒業生たちの寄付によるものでしたから、歌は応援歌「若き血」でした。100メートルほど前方にはこちら向きにゆるい斜面が広がり、左手には遠く幾重にも重なる山々が美しく見えています。応援団長(?)も我々には背を向けて、向こうの山の方を向いて音頭をとりました。合唱が山々に浸みわたると、木々の葉が一つの波のように応えてくれるようでした。私たちまでが、木々の命に包み込まれた感じです。

私たちはエネルギーやものの使い過ぎを非難されますが、それを考えるきっかけとして、やはり自然の一員であることを現場で実感する必要があります。昔の人でなくても、すべての生命には何かの一体感が感じられます。山林とひとまとめに呼ぶときには、遠くから見ると、ひのきの山林だ、杉の山林だと、経済的な価値の高い様な森林だけが立派であるように見えるのですが、一步森の中に足を踏み入れれば、高価な木も名もわからない小さな木も、それぞれに個性があります。人間は庭の雑草を選んで引き抜くようになったらおしまいだ、と言った人がいます。その真意は、庭の草には雑草も上下の区別はないということです。幼児がどんな小さな草を見てもきれいきれいと言うように、既成の価値感に毒されないで、無垢の眼で草や木を見る若さが大切だということです。幼児の心で森を見たいと思います。そのような感動から、これからの森林の新しい役割や価値が見えてくるのではないのでしょうか。

育林友の会も発足後短いながら、行事や「ニュース」発行等のお世話を下さる方々の献身的な努力で、徐々にプログラムが整ってきました。秋の熊野古道の企画など、これからの行事が今から楽しみです。友の会は福澤記念育林会の育林事業を支援することを目的にすると同時に、私たち自身が企画や準備にも参加して自分自身も広く自然に親しむ機会を増やす会として発展させていけるとよいと思います。



長島昭教授

目次：

長島昭教授からメッセージ	1
森を愛する人々の集い報告	2
那須山林での植樹報告	2
今後の計画 (1泊旅行)	2
WWF ジャパンを訪ねて	3
会員が発刊した書籍の紹介	3
福澤記念育林会の山林紹介	4
連載No2「森や樹の紹介」	4

福澤記念育林会のお世話をする役を仰せつかって一生懸命やってきましたが、この度、理事長を退任し、後任として、慶應義塾の田中俊郎常任理事が福澤記念育林会の理事長職を引き継いで下さることになりました。自然がお好きな方ですので大変嬉しく思っております。私は、これからも育林に関する活動を盛んにするため、会員の皆様とご一緒に微力を尽くしたいと思います。

「森を愛する人々の集い」を開催(2002年3月2日開催)



去る3月2日ゲストに芳村真理さん、内山節さん、それに松田輝雄さんをお招きし、三田キャンパス東館8階のセミナールームに於いて「森を愛する人々の集い」と題したトークショーを開催いたしました。

開催日直前まで参加申し込みが少なく心配をしましたが、開始時間前から120名を超す参加者が続々と集まり、超満員の盛況と成りました。

トークショー終了後、場所を北館ファカルティークラブに移し懇親会を開催、ゲストを交えて楽しい時間を過ごしました。

黒羽山林植樹 (2002年5月11日開催)

5月11日、栃木県黒羽町(くろばね)の国有林の伐採跡地で、総勢76名が参加して植林を行いました。

この事業は1972年に慶應義塾を卒業された皆様方が、卒業25周年を記念して募金をし、その一部を育林資金として寄贈を頂き実現したものです。

参加者は那須塩原駅に集合、小型バスに分乗し芭蕉の里で知られる黒羽町に到着、同町の川上健康増進センターで記念植樹セレモニーを開催、セレモニー終了後、現地山林に移動し「黒羽・友情資産25年の森」と記した看板の除幕をし、お弁当を頂いた後に「ヒノキ」、「山桜」、「大山桜」を植林しました。今回の事業はご家族の参加も多く、小さなお子様のご両親と共に楽しそうに植樹に取り組まれている姿が特に強く印象に残りました。



今後の計画 (三重の森林と熊野古道を訪ねる旅)

11月2日～3日にかけて、1泊2日で「育林友の会」三重の森林と熊野古道を訪ねる旅を計画しています。詳細が決まりましたら改めてご連絡を致します。

第一日目 尾鷲(土井山林) 海山町(速水山林内の熊野古道) ホテル

第二日目 ホテル 志木の森 伊勢神宮(内宮参拝・神宮林見学) 解散



速水さんの森林内の熊野古道



高校生が活動する志木の森



伊勢神宮



伊勢神宮の杉の大木

三重は海・山の自然に恵まれ、美しい風景と歴史の重みを感じさせる素晴らしい地域です。特に今回は三重県で古くから林業を営んでおられる会員のお世話で、普段は見る事の出来ない伊勢神宮の森や、FSCによる森林認証を取得された速水林業の美しい林地内を通る熊野古道の探索など魅惑に富んだ計画を立てています。ご期待下さい。

FSC 森林の国際認証制度。環境への配慮等が審査の対象。

慶應フォレストクラブ(KFC)の学生が「慶應-清水の森」で森林体験合宿生活

8月26日から大学生達が和歌山県清水町で森林体験合宿をします。参加ご希望の方は下記にご連絡ください。マルカ林業株式会社 海瀬亀太郎 TEL073-436-1185 FAX 073-436-1187

E-メール kaise@1965.jukuin.keio.ac.jp

自然保護にご尽力されている

(財)世界自然保護基金ジャパン「WWF ジャパン」を訪ねて

今回は東京タワーを間近に見上げる、港区芝に本部がある「WWF ジャパン」を訪れました。

WWF ジャパンは、スイスのグランに本部がある WWF (World Wide Fund Nature) ネットワークの一員として1971年に設立され、現在約3万7千名の個人サポーターと、約600の企業・団体の支援により運営されている財団で秋篠宮文仁親王殿下が名誉総裁を務められています。

お伺いしたところによると、地球上で名前についている生物は、約175万種(実際には5千万種とも、1億種とも言われる)があり、それらは地球の生態系の中ですべて進化を通じてできた兄弟であり、人間もその一員として直接的、間接的に相互に関連し合っているということです。

世界銀行は「熱帯林に生存する種の25%が2025年までに絶滅するだろう」、更に、「地球環境の悪化が世界中で進行し、将来人間の持続的生存すらも危ぶまれている」と警告を発しています。

その原因は、人間による生息地の破壊、移入種の脅威などですが、この地球環境問題を解決していくためには、地球規模の視野から身近な問題を解決していく個人、企業、行政の三者が相互に協力しながら行動することが求められています。

WWF はそういった背景のもと個人・企業・政府との調整役を担いながら、生物の多様性の中で人間が自然と調和して生きられる未来を築くことを目標にしています。

その具体的な活動は

- 主として途上国の自然保護活動の支援。
- 日本国内の自然保護活動。例えば、サンゴ礁や干潟など水環境の保全、森林保全、地球温暖化防止、野生生物の国際取引監視、環境教育の普及など。
- 国内の研究者や身近な自然保護を進める市民グループの活動に対する助成。

などです。

地球上には人間の生存にとって、どのような影響があるのかも告げず、名も知れずに絶滅する野生生物も多くあります。私たちに出来ることは、まずこの自然環境で何が起きているかを知り、どのような解決策があるかを理解し、そして自分で出来ることから行動することが必要です。

WWF の活動に関心を持つとともに、この活動に参加することの重要性を認識し皆様も参画されることをお勧めしたい、とのことでした。



詳しくは WWF ジャパンのホームページ <http://www.wwf.or.jp> をご覧下さい。

会員の著書の紹介



会員の仲津英治さんが「地球に謙虚に」と題した本を書かれたので、ご紹介いたします。著者は、長年新幹線の技術開発に取り組んでこれ、新幹線をいかに静かに走らせるかの命題に、フクロウの羽根とカワセミの嘴の形状を応用して、この難題をクリアされた事が知られています。

タイトルを「地球に謙虚に」とされた理由として、最近良く使われている「地球に優しい」という言葉は、人間が地球上の他の生物より一段高位にあるとの考え方から出た言葉だと考え、「私たち人間も地球に生かしてもらっている生物の一員であることを認識すべき」という思いが込めて、このタイトルを付けられたとの事です。

また、本書では、「地球環境容量」という考えに立ち食糧や資源・エネルギー、環境問題に言及されています。

特に、森林については、私たちにとって、安らぎ、癒しの場所であると同時に、貴重な木材を提供してくれていることが書かれています。そして、将来はエネルギー供給源としても可能性を秘めていることが述べられており、著者の森林を思う気持ちが伝わって来る素晴らしい著書です。

四六判・195ページ・1400円(税別)・近代文芸社 = 03-3942-0869

栃木県黒羽町山林「友情資産 25 年の森」の紹介 人工衛星ランドサットから



(現地は黄色い矢印付近)

栃木県黒羽町にある「友情資産 25 年の森」と名付けられた山林です。衛星写真で白っぽく写っている所は住宅や道路で木の生えていない場所です。

この山林のある黒羽町は日光・那須連山のふところに抱かれた自然豊かな町です。また古くから交通の要所として栄えた歴史ある街でもあり、松尾芭蕉ゆかりの地としても知られています。林道に登る途中には、境内が美しい雲巖寺(1126年開山)もあり是非立ち寄りたい所です。また6月にもなると那珂川で鮎漁が始まり、太公望が釣りを楽しみ、また家族は河原の観光梁で存分アユのフルコースを楽しむことができます。「友情資産の森」には山桜や大山桜を植林しており、10年を待たずに、桜を楽しむことができるようになるかと思えます。

是非この素晴らしい黒羽の地を訪れられる事をお勧めいたします。

連載 「まむし谷の初夏」

岸由二(経済学部教授 - 生物学)

今年の初夏は、<まむし谷>がいつもと違う。<まむし谷>は、日吉キャンパスの東の領域を南北に刻む細長い谷だ。谷の周囲はぐるり濃い緑の森に縁どられ、谷底には、テニス、バスケットなどの屋外コートが広がっている。中央のテニスコートの東側の縁から向いの斜面を見上げれば、深い雑木林の上に、記念館の偉容がある。谷のそのあたりが、いつもの夏と、違うのである。

まず不思議なのは、カラスの姿が少ないこと。日吉の森は近隣のカラス達のねぐらとして有名で、一昨年の川崎市の調査では、なんと3000羽が確認されていた。記念館周辺はとくに密度が濃く、夕暮れがちかづくと記念館の屋根とその周辺は、ハシブトガラスたちの独壇場となっていた。そのカラスが激減したのである。午後、遠方から帰還するカラス達はなぜか、記念館周辺の<まむし谷>の上空を、不安げに飛ぶ。記念館の屋根で休む個体もいるのだが、堂々と記念館の屋根の中央部に展開することはなく、南の端の部分にこわごわ仮着地という感なのである。

種明かしはタカだった。今年、日吉の<まむし谷>に、ツミが住み着いたのである。晩春に発見したのは経済学部の君。ツミは頻繁に鳴き、しばしば森から舞い上がり、ハシブトガラスの集団を襲う。体はキジバトサイズと小型だが、戦闘的なことこの上ないツミは、<まむし谷>の下手西側の上空を侵犯するハシブトガラスたちを容赦なく攻撃し、追い散らしてしまうのだ。急上昇、急降下の技を駆使して襲いかかる小さなタカに、カラス達はなすすべがない。昨日、<まむし谷>にでかけた君は、ツミを同時に二羽確認できたと大喜び。繁殖しているのかも知れないと思う。<まむし谷>自然散策を始めて私はもう20年ほどになるのだが、タカの繁殖は、記憶がない。

<まむし谷>は、記念館から谷に降りる長い階段の南側に小さな谷がある。合気道部部室の裏手に広がるこの谷は、日吉の生物調査をすすめてきた教員や学生の間では、<一の谷>の呼称で知られている。谷の下手には絞り水の気配がありキショウブの小群落がある。斜面には杉やカシ、谷底の中ほどに、杉の木立が広がっている。多摩三浦丘陵の谷戸地形の小さなモデルのような領域なのだ。しかしその緑の領域は、もうかなりの年月にわたって放置され、谷底はササ、斜面は一面のツル草に覆われる状態が続いていた。ツルの主体であるクズは、谷中央の杉林の樹冠を全て覆い尽くし、枯死する大径木も出はじめていた。その谷が、この初夏、とても爽やかな眺めになった。これが、この初夏の<まむし谷>、もう一つの大違い、なのである。合気道部の裏の絞り水の地帯では、棚田状の小さな水辺の造成が始まっている。普通部の子どもたちが、生物教室サポートを受けて、ピオトープづくりを始めたものだ。

谷底を覆っていた笹藪は消え、杉林を覆い尽くしていたクズのマント群落も成敗され、枯杉の少し本格的な除去作業も進んでいる。谷の南側の斜面の裾のわずかな湧水を頼りにして小さな池もできあがり、竜神池の名前がついた。整備を進めるのは、<日吉丸>という名前の学生・教員集団を中心とした、日吉の学生・教員達。普通部も日吉丸も週一度の定例作業ではあるのだが、肅々と、谷戸の水循環、雑木林再生の作業が進んでいる。やぶ蚊に襲われながらの猛暑の草刈り、カントリーヘッジ造りの土木作業。そんな作業に付き合ってくれる子どもたち、若者たちの登場は、ツミの登場さえ吹き飛ばしてしまうほどの、大きな不思議といって良いかもしれない。2002年初夏。小さなタカと、森を守る若者たちの登場で、日吉キャンパス<まむし谷>は、見事な夏に出会えたものだ。

